

関西大学創設期展に取り組んで

福井智佳子

一 新関西大学会館の完成

新しいシンボルゾーンの出現

平成八年十月二十八日、本学の「顔」が一変した。新関西大学会館の完成により、正門付近が大きく様変わりしたのである。

新関西大学会館は北棟と南棟の二つの建物からなり、その間を秀麗橋という空中回廊でつないでいる。新関西大学会館の建設にあわせて、キャンパス周辺では、正門

だけでなく、柵や塀といった外部と遮断する構築物ができるかぎり取り除かれた。大学が本来持つ姿、つまり、外部に解放され、束縛されることのない自由な空間が出現したといえるのである。

そして撤去された校門の代わりを空中回廊（秀麗橋）が果たすようになった。緩やかに傾斜する坂を登りながら、この秀麗橋の下をくぐる時には、これから前方に広がる無限の知的空間に入っていくという快い精神の昂りを覚えるのである。

大学が新たな時代へ向かうことを具現するかのような

この建物は、学生のみならず、受験生や校友、地域の人々にも広く門戸を開けている。正面向かって左側に位置する北棟には、一階に就職部と入学試験部、三階に国際交流センター、四階に保健管理センターがあり、学生や受験生が利用しやすい立地になっている。アートギャラリーも北棟一階の入口はいつてすぐ右側にある。一方、南棟の一階には来訪者のインフォメーションを務める守衛室があり、二階は就職資料室、三階、四階は喫茶室、レストランとなっている。北棟が大学の情報発信、情報提供の役割を担うとするなら、南棟は主に学生、教職員のリラクゼーションの場といえよう。この新しい「顔」は、竣工した当初から多くの学生や受験生が訪れ、今や、学生にとつても、大学にとつても重要な役割を果たしているのである。

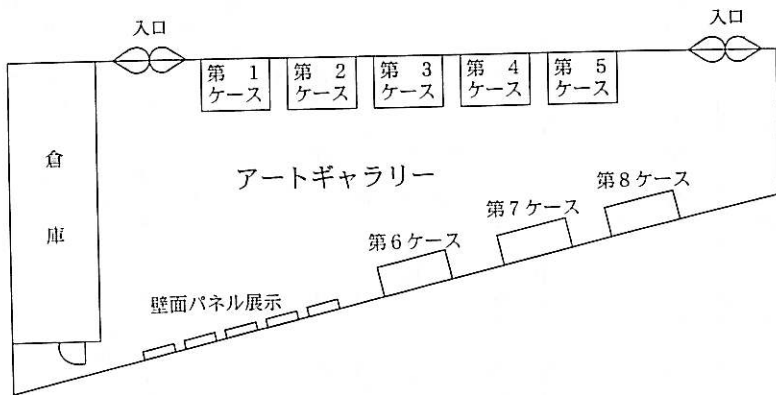
そして、ここにアートギャラリーができたことで、本学には博物館、図書館とあわせて、展示施設が三か所に増えた。様々な部署から発信する情報形態の一つに「展示」という新しい選択肢が加えられたと言つていいだろう。

う。今回、出版部出版課（年史資料編集室）はここを利用する機会を与えられ、大学の歴史を広める目的で展示を行ったのだが、アートギャラリーの空間が、大学と学生・教職員をつなぐ結び目になっていくのを実感した。これは展示に携わつた我々にとつても有意義な時間だった。平成九年二月十二日から始まった『関西大学創設期展—関西法律学校の創設から福島時代の関西大学まで—』と題する展示を担当者の視点から振り返り、以下にその経緯を述べていきたい。

二 展示開催まで

アートギャラリー

まず、アートギャラリーの構造を説明しておこう。先に記したとおり、新関西大学会館の北棟に位置しているが、入口から奥に向かってすばまった直角三角形の一部を切り欠いた台形の空間になっている。壁はうすい灰色がかつたクリーム色で明るいながらも落ちついた雰囲気



展示配置図

を与える。天井にはスポットライト用のレールが引かれ、どんな展示にも対応できる仕組みになっている。さらに明かり取りの天窓が五か所あり、太陽光の影響を考慮して、窓の内側に乳白色の亚克力板が施されている。

展示ケースはのぞき込み型ケース（縦九二二ミリ×横一、八二四ミリ×高さ一、三五〇ミリ）五点、全面ガラスでできた縦型の大型ケース（縦七六二ミリ×横一、八二四ミリ×高さ二、七〇〇ミリ）三点の計八ケースが配置されている。四方壁面と大型ケース内には写真パネルが展示できるよう、天井にピクチャーレールが引かれている。

アートギャラリー運営打ち合わせ会による検討

新関西大学会館がオープンする時のアートギャラリーにおける展示については、平成八年十月九日に打ち合わせが行われ、その結果、図書館所蔵資料による『戦国武将の書状』展を行うことが決定した。その後、アートギャラリーの運営については、担当者レベルのアートギャ



アートギャラリー

ラリー運営打ち合わせ会で、企画の選定及び展示期間を審議するようになった。図書館による展示が決定してほごない十二月十日に打ち合わせ会が開催され、以後の展示について検討を加えた。年史資料編集室としては、以前より本学の歴史を伝える必要性を感じていたため、打ち合わせ会でそのことを提案したところ、新しい関西大

学の顔となる場所で歴史を再確認することは意義深いと見解が一致した。こうして、初めての年史展示が決定し、一月中旬からの開催に向けて準備がスタートしたのである。

準備作業

初めてということもあり、展示はひとまず関西大学の歴史を二分し、その前半期、つまり、明治十九年、本学の前身である関西法律学校が創立されてから、大正十一年に千里山学舎へ移転し、旧制大学に昇格するまでを範囲とすることにした。

本学がどのように誕生し、いかにして大きくなってきたのかをできるだけ多くの人に知ってもらうため、分かりやすく、興味を引く展示にしなければならぬ。在学生だけでなく、その父母や校友、受験生にも関西大学の歴史と伝統に親しみを感じてもらえるよう心がけ、作業を始めた。

十二月の打ち合わせ会の決定から一週間ほど過ぎ、展示の大体のイメージをつかんだところで、各年代ごとの展示概要や創設者ごとの所蔵品を分類する作業を開始した。しかし、いざこの作業にかかると、時代によって所蔵品の数にばらつきがあることに気付いた。また、保管場所が一か所でないため、確認するのに時間がかかり、

準備作業をしながら、保管場所の整理もするという形になってしまった。具体的な作業は次のような要領で行った。

	事項	準備内容
10	展示案内表示・ポスターの作成	展示の目的、展示物の概要等に関する企画案を作成する
9	展示目録の作成	企画案を年史編纂委員会、アートギャラリー打ち合わせ会等に諮る
8	難読資料の読み下し文作成	展示ケースにあわせてテーマと展示品を分類した一覧表を作成する
7	展示品のキャプション作成	必要に応じ資料ごとに額装等を行う
6	展示解説文の作成	展示ケースごとに特徴的な写真のパネルを作成する
5	写真パネルの作成	展示ケースごとにキャプションを作成する
4	展示資料の準備	難読資料（軸装品等の毛筆文書）の読み下し文を作成する
3	展示資料一覧表作成	展示の目的、展示品の解説等を収めた展示目録を作成する
2	委員会へ提案	展示室の入口に設置する展示案内表示・ポスターを作成する
1	展示企画案作成	



写真パネルで伝える学舎の変遷

14	展示の開催案内状の作成と送付	展示の開催案内状の作成	展示の開催案内状を作成し、関係者に送付する
13	展示のPR原稿の作成	展示のPR原稿の作成	「関西大学通信」「関大」等に掲載する記事の原稿を作成する
12	準備した資料等の展示・配置	準備した資料等の展示・配置	準備完了の右記物品4〜11を予定した場所に展示・配置する
11	芳名録の作成	芳名録の作成	展示室内に設置する芳名録を準備する

事務室と保管場所の行き来を繰り返し、展示品の候補がかたまと、一覧表を作成した。これは展示の流れをつかみ、展示品一つひとつに意味付けするのに役立つ。また、展示が終わった時、もとの場所に正確に

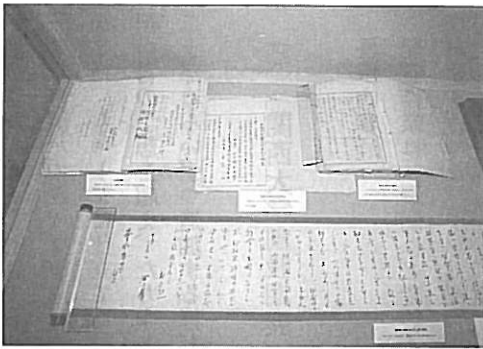
戻せるよう担当者の備忘録として最後まで機能した。

次の作業は展示品の点検である。必要なものは額装し、写真撮影やパネル作成を行った。額装、パネルは全部で十三点にのぼった。また、改めて表装し直さなければならぬものも見つかった。本来なら、専門業者に依頼するのだが、時間と予算の折り合いがつかず、応急処置として本学の書道部に協力をお願いして、担当者が作業を手伝うこともあった。こうして展示品の調整を終え、展示ケースごとの写真パネルができあがると、ケースの説明文の作成に移った。

時間との闘い

展示において説明文は展示品同様大きな意味を持つ。説明文のない展示品はただの「物」になってしまいうからだ。誰が見てもわかるように、そして饒舌でも無口でもない説明文にするため推敲を重ねた。そして内容が決まるとそのパネルを作成した。ケースの説明文はなるべく大きく、読みやすい文字にするため、拡大コピーで大き

さを検討し、A2サイズ（横幅五八センチ・五五桁）の大ききで見出し文四二ポイント（文字の大きさ）、説明文二二ポイントに落ちついた。これ以上拡大すると文字のドットが乱れ、かえって見にくくなるからだ。パネルは厚さ七ミリの「のりパネ（紙アルテ）」を使用。展示品のキャプションは一四ポイントを使った。



専門学校から大学へ隆盛する福島時代（第5ケース）

事務室での準備が一段落ついた時には、すでに十二月も中旬となっており、冬季休業を間近に控えていた。十二月以降は通常業務も忙しくなったため、展示作業は空いた時間を見つけて行うようになった。当初は年

明けの一月中旬から開催する予定にしていたため、まさしく時間との闘いになってきた。そして、展示品のキャプションパネルを作成し終わった時点で冬季休業に入った。

年が明けて、いよいよ展示ケースに配置する作業に入った。事前に事務室で配置レイアウトのりハーサルを行っていたため、この作業はスムーズに行えた。事務室からアートギャラリーまでは七百メートルほどの距離があるため展示品の搬送は車と台車を使用した。屋外を移動するので天気予報を気にする毎日であった。ケースの中に展示品を配置したのち、先に作成したキャプションを付け加えていったが、読みやすい角度で配置するため、のりパネの廃材を裏側に貼り付けて角度を調節した。

展示室での作業と並行して、読み下し作業も続けられた。今回は書簡三点の読み下しがあり、書簡が認められた当時の様子が垣間見られる楽しい作業だったが、担当者ではカバーしきれない箇所があり、古文書に造詣の深い図書館職員に協力をお願いした。

展示目録のことに触れておこう。内容はケースごとに分類し、展示のキャプションを加工して、説明を加えた。A5判、六ページに仕立てた。開催時に百部作成したが、担当者の予想を超え、たちまちなくなり、一週間に一度、二十部ぐらいずつ追加するほどだった。

三 「関西大学創設期展」のスタート

展示内容

配置作業は一週間ほどで終え、開催直前の数日で細かな調整を行った。予想外だったのは、空調を入れるとつるした説明パネルが風で揺れてしまうことで、結局、テグスで固定して揺れをおさえた。また、ケースごとに湿度調整にシリカゲルを置きたかったのだが、今回はそこまで手が回らず、何も入れなかった。定期的な湿度が少なく、展示期間も短かったため、問題はなかったようだが、資料保存のためには処置を施すべきで、今後の課題となった。



創立のころ（第6ケース）

さらに展示案内表示や芳名録を作成し、最終調整を行った。大学にあつてはゆるがせにし難い、学年末試験、さらに大事とする入学試験の終了を待つて二月十二日、いよいよ展示がスタートした。当初の予定より一カ月遅れであった。展示の内容は次のとおり。

ケース番号	テーマ	展示物
1	時代を読んだ創立者たち・ポアンナードと関西法律学校	<ul style="list-style-type: none"> ・創立者群像のレリーフ（写真） ・ポアンナードレリーフ ・「性法講義」（明治十年六月司法省蔵版。司法省法学校でポアンナードが講義したものを井上操が筆記） ・小倉久愛用のペン立てとペーパーナイフ

3	2	1
隆盛する関西法律学校	第一回卒業式の挙行・創立当時の学生気質	
<ul style="list-style-type: none"> ・興正寺（北門と角櫓）（写真） ・第十回卒業生梅崎極の卒業証書 ・統計表（明治三十四年一月から三十八年 	<ul style="list-style-type: none"> ・第一回卒業生（写真） ・第一回卒業生津島（内田）重成の及第証書（講師全員が署名捺印したもの） ・筆記具（津島（内田）重成愛用のもの） ・津島（内田）重成の受講ノート ・関西法律学校講義録（校主吉田一士が発案したもの） ・初期の学校帳簿（学生の授業料納入に使用した学費領収割印簿） 	<ul style="list-style-type: none"> ・小倉久愛用の硯受け（黒檀） ・小倉久愛用の筆置きと筆洗い ・小倉久愛用の巻紙置き ・小倉久愛用の蝶ネクタイ ・小倉久のアルバム（小倉久がフランス留学中に購入したもの。収録の写真もフランスで撮影したもの） ・「風俗警察論」（小倉久が内務省警保局長の立場から東西の荒淫の歴史とその実態、取締り立法等を調査し、人権尊重に基づいて研究・著述した未完の著作） ・志方鍛の勲二等瑞宝章 ・志方鍛の辞令（判事として大阪始審裁判所への勤務を命じるもの） ・借用書（初代校長小倉久・校主吉田一士の依頼により土居通夫が創立資金の一部として百円を融通したもの）

3	4	5
<p>七月までの学事統計をまとめたもの)</p> <ul style="list-style-type: none"> 司法省報告書(明治十九年の創立から明治三十年までの十一年間九回におよぶ卒業者氏名および入学年月日を卒業年度別に列記したもの) 	<p>関西法律学校から私立関西大学へ(江戸堀時代)</p> <ul style="list-style-type: none"> 江戸堀時代の卒業式(写真) 官署諸報告書(司法省への教員の分担科目等の報告書) 学制一覽(明治三十八年の学則。現存する最古のもの) 垂水善太郎幹事宛新免峰彦の書簡 寄附金申込書 垂水善太郎幹事宛高根義人教頭の書簡(明治三十九年六月七日付、商業学科の開設に伴う教員編成に関するもの) 	<p>専門学校から大学へ(福島時代)</p> <ul style="list-style-type: none"> 福島学舎での授業風景(写真) 土地売渡書(明治三十九年十一月十五日付、福島校地を大阪生命保険会社から購入したもの) 建物所有権保存登記申請書 卒業アルバム(明治四十二年、現存する最古のもの) 臨時社員総会決議録(大正八年一月二二日開催の臨時社員総会で、社団法人関西大学の解散と財団法人関西大学の設立を決議したもの) 垂水善太郎幹事宛河上肇の書簡(大正四年七月二十九日付、関西大学への出講を断るもの)

6	7	8
<p>創立のころ</p> <ul style="list-style-type: none"> 掛軸(関西法律学校発祥の地」史跡顕彰碑拓本) 「関西法律学校発祥の地」史跡顕彰碑(写真) 関西法律学校設立の主旨を伝える記事(写真) 法学生徒募集広告(写真) 関西法律学校の広告(写真) 	<p>創立者の遺品</p> <ul style="list-style-type: none"> 掛軸(志方鍛書) 掛軸(小倉久書) 小倉久愛用の旅行トランク(明治十七年購入のルイ・ヴィトン製トランク) 	<p>大正時代の学生生活</p> <ul style="list-style-type: none"> 竹田繁七(相撲部・第五代学生横綱)の優勝記念パレード(写真) 竹田繁七の土俵入り(写真) 竹田繁七の優勝銀杯 絹手綱(ミニチュア)と感謝状(竹田の名誉会長就任を記念して西日本学生相撲連盟より送られた記念の絹手綱のミニチュア) 日本学生相撲選手団の試合風景(写真) 大日本学生選手権歓迎大相撲の番付表

見学者の反応

これらの展示品の中で特筆すべきは、小倉久が愛用したルイ・ヴィトン製の旅行トランクであろう。彼は本学創立者の一人で、関西法律学校の初代校長を務めた人物



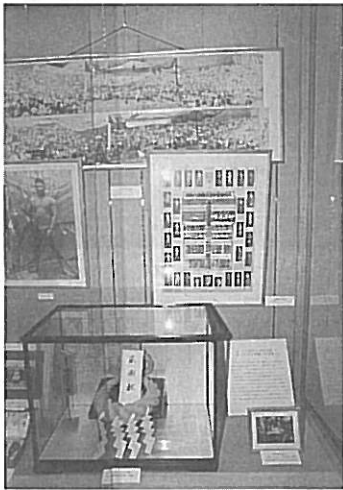
話題となった小倉遺愛のルイ・ヴィトン製トランク（第7ケース）

である。このトランクは、駅逦官となった小倉が明治十七年にポルトガルのリスボンで開催された「万国郵便会議」に出席したのち、フランスのパリに立ち寄った時に購入したものであることが、ルイ・ヴィトン社への照会により明らかである。小倉は後藤象二郎について二番目に古い日本人ユーザーで、それゆえに小倉のトランクはおそらく日本で現存する一番古い物である可能性が高いと推測されているのである（このことは前号の『年史紀要第九号』で熊博毅が記した『関西大学百年史』の編纂

を振り返って（一）」に詳しい。

そのほか、創立者たちの遺品など、その人となりが想像されるものや、第一回卒業生の写真や卒業証書、最も古い学則、土地売渡書や建物所有権保存登記申請書など、当時の学生の様子や次第に隆盛におもむく学校の変遷がわかる展示品を配列した。

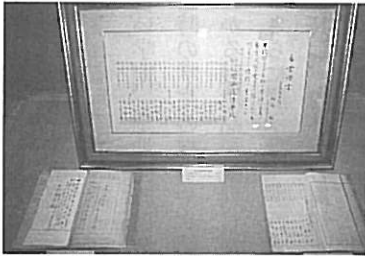
さらに展示は『関西大学通信』や校友会紙『関大』にPRし、内外への周知をはかった。その結果、春休みにもかかわらず多くの学生が見学し、また受験生の姿も見



学生横綱竹田繁七の活躍を伝える資料（第8ケース）

られた。百年をこえる関大の歩みをたどる展示とあつて、朝日新聞社と産経新聞社からも取材を受けた。特に産経新聞では朝刊の一面にカラー写真入りで報道された。取材の中心となったのはやはり小倉の旅行トランクだったが、明治・大正時代の教育制度や学生生活の一端が垣間見られるものだけに高い関心が寄せられた。こうした影響もあつて、卒業生からの問い合わせや学生の見学も増え、この展示の持つ意義の大きさを実感させられたのである。

なお、展示は当初、一月から三月末までの予定であったが、スタートが遅れたのと、入学生やその家族にも大学の歴史を知ってもらいたいということから、四月末まで延長することになった。このため、四月六日、校友会主催のスプリングフェスティバルが開催された時には、校友約二百名がアートギャラリーに足を運んでくれた。大正末期から昭和初期の卒業生も来られ、展示の写真を見ながらそれぞれに当時へと思いをはせる姿も見受けられた。



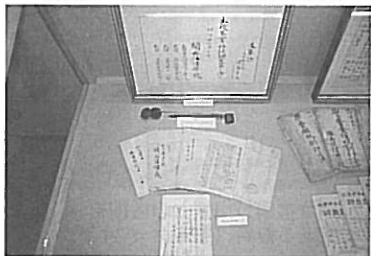
第3ケース



第1ケース



第4ケース



第2ケース

開催時のエピソード

開催期間中は、週に二、三回程度、目録の補充を兼ねて見回りを行った。また、アートギャラリーの開閉は南棟一階に常駐している守衛室の方々にお願いした。日曜、祝日を除く毎朝十時に開錠、夕方四時に施錠してもらい、時折、中の見回りもしていただいた。展示目録がなくなつた時や、見学者から質問が出た時などは連絡してくれ、これにより担当者もスムーズに運営できたと思う。

また、担当者として嬉しかったことの一つに、この展示をきっかけとして資料寄贈の申し出を受けたことである。スプリングフェスティバルに來られた本学元職員の方藤井収氏からはご自身の修士記と学士卒業証書を寄贈いただいた。新聞記事を見てかけつけて下さつた井上操（創立者の一人）のご遺族、井上素夫氏（操の長男、敏男の子息）と原系重氏（操の長女、誠子の長女）からは井上の著書『刑法述義』の寄贈にあずかつた。さらに本学の先生方からも創設者の関連資料や、年史室が把握できていなかつた遺族の方々の住所なども教えてもらった。

四 展望と課題

展示を終えて

こうして、四月三十日、三か月近くにわたる展示を終了した。何もかもが手探りの作業であつたが、確かな手応えをつかめたことで、所期の目的は達せられたと自負している。

振り返ってみると、展示を通して得るものは多かつた。先に記したように、先生方から年史関係の情報をいただいたり、大学で保存してくれるのなら、と貴重な品を寄贈していただいたことなどもそうである。それに加え、芳名録に記された見学者の感想文には大変励まされ、また、勉強にもなつた。「関大がこんな昔からあるなんて知らなかつた」、「自分が今いるこの大学にはいろんな歴史が刻まれていることを実感した」という学生もいれば「母校の歴史を初めて知り、現在に至るまで前進を続ける本学に卒業生として喜びを感じる」と記してくれた校友も



芳名録に記帳する見学者

ず、年史の業務にたずさわる者として、その任務の重さを痛感したのである。

さらにもう一つ、問題点と反省点も述べてみたい。これについては数えあげればきりが無いのだが、第一に展示技術、資料保存技術の未熟さがあげられる。例えば、キャプションなどは見学者の立場に立つて細心の注意を

いた。中には「関大がより近い存在になった。受験を頑張りたい」と記す受験生もいた。年史の展示を通して、大学の歴史が確実に広がりを見

払って作ったのだが、字が小さいという指摘が若干あった。また、修繕を必要とする資料については、専門家に委託するのが最善であるものの、担当者レベルで処置を施さざるを得ない場合があり、そうした時に備えて基礎的な知識や保存技術を向上させておかなければならないことを痛感した。今回は拓本の表装を緊急に行ったわけだが、日常的に資料の管理作業を行っておけば、こうしたことは防げたと思っている。

第二に年史資料の収集問題がある。年史室が所有している資料は年代や人物によつてばらつきがあり、そのこととはある程度は仕方がないが、恒常的に資料集めを行わなければ、その格差は広がる一方である。今回の展示で得た経験をもとに、今後はこちらから情報を提供していき、年史関係者の輪を広げていかなければならないだろう。

今後の展望

今回、担当者として改めて実感したのは、恒常的な年

史資料展示の必要性であった。本学は、『五十年史』、『七十年史』、『百年史』と計三回（八冊）の年史を刊行しているが、学生が全員その存在を知っているかといえば、否、と言わざるを得ないだろう。それを讀んだことがある人に至ってはなおさらである。しかし、だからといって、学生は大学の歩みに興味がないということにはならない。今回の芳名録の中にも「母校の歴史を初めて知ったが、もっと詳しく知りたい」という学生が数多く見られた。

このことからそれは分かるであろう。学生や校友にとつて、母校がどんな歴史を持つのかを知ることは重要なことだと思ふ。これによつて学校への帰属意識は高まり、大学への関心も強まるはずである。我々教職員もまた然りである。今後は展示だけでなく、大学の歴史を伝える様々な形を探っていき、より充実した情報を提供していきたいと考えている。

「過去と共に歩めぬ者は未来へ進むことはできない」という言葉がある。今ある関西大学は、先人が築いた礎と、現在、本学に関わるすべての人々の努力が実を結ん

だ結果であることを再認識しつつ、この報告を終えたい。

（ふくい ちかこ 出版部出版課主事補）